

原著論文

幼稚園教育要領に見られるモンテッソーリ教育のエッセンス

—環境による教育を実践するために—

金丸 雅子・小田 進一

(2016年12月28日受稿)

抄録： わが国における幼稚園教育の目的は、学校教育法において、「幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」と明示されている。また、幼稚園教育要領により、その目的を実現するための保育内容の基準が示されている。しかし、幼稚園教育要領は幅広い弾力性のある表現となっていることから、具体性には欠けており、また方法論等も明確に示されていない。そのため、幼稚園教育の現場においては様々な模索が行われ、中には必ずしも幼稚園教育要領に沿った実践がなされているとは言い難い状況も見られる。

本稿では、環境を通して行う教育を基本とする幼稚園教育要領について、同じく環境構成に主眼を置くモンテッソーリ教育学の原理（科学的根拠に基づく子ども観や教育観、そしてそこから考え出された具体的方法等）を通して理解、実現していくことが有効との立場から考察を行った。その結果、モンテッソーリ教育が持つ科学的根拠と具体的教育方法が、幼稚園教育要領に具体性を持たせ、その教育的意義を補強するものであることが示唆された。

キーワード：モンテッソーリ教育、幼稚園教育要領、環境による教育

I. はじめに

1989年の幼稚園教育要領の大改訂により、わが国の幼稚園教育は、従来までの教師主導型の教育から環境を通して行う教育へと大きな方向転換がなされた。この方向性はその後の2度の改訂の際も維持され、現行の幼稚園教育要領においても、「幼稚園教育は環境を通して行うものである」ことが幼稚園教育の基本として明示されている。しかし、幼稚園教育要領は幅広い弾力性のある表現となっており、また具体的な方法論なども示されておらず、更には、具体的な教育課程については、各幼稚園や地域の実態に即した創意工夫による編成が求められている。そのため各幼稚園において、幼稚園教育要領で示された保育内容の基準を満たすためのさまざまな教育が実践されているが、必ずしも幼稚園教育要領に沿った実践が行われてい

るとは言い難い。

本稿では、幼稚園教育要領の理解と実践のために、環境構成に主眼をおくモンテッソーリ教育の科学的根拠と具体的教育方法から有効な示唆を得ることが可能であるとの立場から、現行の幼稚園教育要領とモンテッソーリ教育における教育観、環境観について両者の一致点や相違点等を概観し、また、その根拠となる子ども観や具体的な環境構成、教師像について考察を行う。

II. 研究の目的と方法

本研究は、幼稚園教育要領とモンテッソーリ教育学の接近を試み、幼稚園教育要領に示される方向性に対しての科学的根拠や、実践のための具体的な教育方法についての示唆を得、その教育的意義を補強することを目的としている。

そのために、幼稚園教育要領及び幼稚園教育要領解説（以下、解説書）¹⁾、そして、モンテッソーリ博士の著作の分析を中心に、モンテッソーリ教育についての先行研究も援用しながら考察を行う。

Ⅲ. 幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要

わが国の幼稚園教育要領は、昭和31年に作成されてから、昭和39年、平成元年、平成10年、平成20年と4回の改訂が行われている。特に平成元年の改訂においては、わが国の幼稚園教育の大きな転換が図られた。従来までの教師主導型の教育から、「幼稚園教育は環境を通して行うものである」ことが「幼稚園教育の基本」として明示され、また、重視する事項として、幼児期にふさわしい生活の展開、遊びを通しての総合的な指導、一人一人の発達の特性に応じた指導の3点が挙げられた。更には、従来の教育要領では「幼稚園終了までに幼児に指導することが望ましいねらい」が6領域（健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作）に編成されていたが、この改訂では、「幼稚園終了までに育つことが期待されるねらいと、ねらいを達成するために指導する事項の内容」が幼児の発達の側面からまとめられ、5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）に編成され示されている。また、現行幼稚園教育要領（平成20年告示）においては、約60年ぶりに行われた教育基本法の改正を踏まえ、総則の第1「幼稚園教育の基本」の冒頭において「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と、幼児期の教育の重要性が明示され、幼稚園教育の果たすべき役割の大きさが改めて確認されている。

「環境による教育」の方向性は、平成10年、平成20年の改訂の際も維持されており、幼稚園教育の現場において様々な模索と実践が続けられているが、幼稚園教育要領は幅広い弾力性のある表現がなされ、抽象的表現（興味や関心を持つ、親しむ、気付く、楽しさを味わう等）も目立つ。ま

た、幼稚園教育要領の「総則第2教育課程の編成」に「各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即した適切な教育課程を編成するものとする」と示されているように、具体的な教育課程の編成については各園に任されている。そのため、特に私立園では設立の理念に沿った教育活動が可能であるなど大きなメリットもある一方で、各幼稚園における、幼稚園教育要領の解釈には幅があり、必ずしも幼稚園教育要領に沿っているとは言い難い実践などを生む要因ともなっている。平成元年の大改訂時における幼稚園教育現場での混乱、そして1990年代後半から問題となった小学校における「新しい荒れ」の原因が新教育要領の下での幼稚園教育であると囁かれた時代を経て、その後の2度の改訂により現状に合わせた修正がされてきてはいるが、さまざまな模索は続いている。

幼稚園教育要領が示す方向性や保育内容の基準を、どのように理解し実践するべきか、具体的な根拠や方法論についての示唆が求められるといえよう。

Ⅳ. モンテッソーリ教育について

モンテッソーリ教育は、100年以上にわたり世界中で広く実践されている教育法である。

早田²⁾は、モンテッソーリ教育はユネスコによる調査で、世界で最も影響を与えている幼児教育と位置付けられ、2007年ローマでの「こどもの家」100周年を記念した国際会議において、110カ国22,000校のモンテッソーリ園・校の存在が明らかにされたと報告している。

このように、長期間にわたり思想も文化も異なる世界の国々において実践され続けているモンテッソーリ教育は、どのように開発され、どのように普及していったのだろうか。

まずは、モンテッソーリ教育の提唱者であるマリア・モンテッソーリ博士（1870-1952）の略歴³⁾

4) から見ていきたい。

モンテッソーリ博士(以下、モンテッソーリ)は、1896年ローマ大学医学部にて学位を取得、イタリアにおける最初の女性の医学博士となった。その後、ローマの知的障がい児教育施設における教育で一定の成果を上げたことにより、その教育方法を健常児の教育にも適用することで、より大きな効果をあげることができるのではないかという考えに至り、更なる研究のため、1901年ローマ大学に再入学、哲学科にて実験心理学、人類学、教育学を学び、ローマ大学の教授として教壇に立つこととなる。

1907年、ローマのスラムであるサン・ロレンツォ地区に「子どもの家」が開設され、モンテッソーリはその責任者として、3歳から6歳までの子どもたち60人の教育に当たることになった。決して満たされているとはいえない環境ではあったが、そこでの教育活動からモンテッソーリ教育法が開発されていくことになる。「モンテッソーリ教育は最初、実験と経験、そして観察と発見の過程によって展開しました」⁵⁾と述べているように、モンテッソーリは、子どもたちの生活の場を自身の研究室と位置付け、そこでの子どもの観察による気づきを検証、理論化し、数々の発見から具体的方法へと、モンテッソーリ教育法を構築していったのである。

その教育的成果により、「子どもの家」は注目を浴び、世界各国からの見学者が訪れるようになっていたが、1909年に最初の著書である『子どもの家における幼児教育のための科学的教育法』(『The Montessori Method: Method of scientific pedagogy applied to the education of young children in the Casa dei Bambini.』)を出版すると、数年内に20か国以上で翻訳され、モンテッソーリ教育法は急速に普及していった。世界の各地にモンテッソーリ協会の支部や学校が設立され、モンテッソーリ自身も各地での講演や教員養成コースの開設に尽力した。二度の大戦があり、ナチスによるモンテッソーリ教育に対する迫害などもあっ

たが、この間も、オランダ、インドなど国を変え休むことなく教育と研究は続けられた。2度の世界大戦を経験したモンテッソーリにとって平和は切実な思いであり、晩年は、その精力を平和教育に注ぎ込んだ。1949年から3年続けてノーベル平和賞候補に挙げられたが辞退しており、自身の成果は子どもが与えてくれたものを受け取って表現しただけであって、子どもの通訳であったにすぎないと、今世紀の偉大な教育者と呼ばれていることに異議を申し立てている。⁶⁾

スタンディング⁷⁾は、モンテッソーリが発見したのは、われわれ大人が子どもの特質として考えているより、はるかに質の高い異質なものであるとし、モンテッソーリがその存在を明らかにした子どもの新しい特質として、モンテッソーリ教育の鍵ともなる発達の法則である「敏感期」や「集中作業による正常化」、そして「驚くべき集中力」「繰り返し作業の愛好」「秩序の愛好」「自由な選択による活動の原理」「遊びより仕事を好む子どもたち」「賞罰は無用であること」「静けさの愛好」「個人の尊厳という自覚」等々を挙げている。モンテッソーリは、これらの特質に基づいて構成された具体的な環境の中で、「提示」と呼ばれる方法により子どもたちがその環境を使いこなせるようにやり方を示し、子どもが「自分で自分をつくり上げる」ことを援助した。この、「適当な環境の構成」と、それによる「子どもの自己発展への助成」が、オスワルト⁸⁾がモンテッソーリ教育の二大原理と分析するものである。

モンテッソーリが発見した子どもの特質は、時代や場所が違っても普遍的に見られる子どもの本質であり、100年以上前にモンテッソーリが発見した事実を、私たちが実際に目の前にいる子どもを通して実感することができる。まさにモンテッソーリの発見を追体験できるということである。更には、モンテッソーリの発見が、現代において脳科学による裏付けが示唆される⁹⁾など、色褪せないばかりか、ますます教育的意義が高められている。

日本における幼児教育への影響は決して大きいとは言えない。それでも、「日本におけるモンテッソーリ教育導入園一覧」¹⁰⁾には、700を超える幼稚園、保育園等が名を連ねている。

平成元年の大改訂の際、この改訂に関わった人たちは、欧米の幼児教育の現場を視察して回り、モンテッソーリ教育から大きな示唆を受けたという。¹¹⁾モンテッソーリ教育のエッセンスは、日本の幼稚園教育にも明らかに影響を与えていると考えられる。

V. 幼稚園教育要領とモンテッソーリ教育

平成元年の幼稚園教育要領の大改訂において「環境による教育」が打ち出された当初、多くの幼稚園が混乱の中で模索を始める中、モンテッソーリ教育の実践園は新しい幼稚園教育要領を歓迎し、実践者たちはモンテッソーリ教育の更なる普及を期待した。それは、モンテッソーリ教育が新幼稚園教育要領が示す方向性に対する根拠と具体的方法を持っていたからであろう。現行の幼稚園教育要領の下でもその状況は変わっていない。

本章では、具体的に幼稚園教育要領（関係法令を含む）とモンテッソーリ教育学における教育観や環境観などについて概観し、両者の一致点や相違点、またその根拠となる子ども観、更には具体的な環境構成、教師像について考察を進めていく。

1. 教育観

本節では、まず両者の教育の目的について確認し、教育観について考察をしていきたい。

わが国の教育の目的は、教育基本法第1条において「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」と明示されている。一方、モンテッソーリ教育の目的について、モンテッソーリ自身の著書にはまとまった説明はみられないが、各所（講演録も含めて）において明確にそれを窺い知ることができる。市丸¹²⁾は「モンテッソーリ教育の第一の目的は、子供一人ひとりの人格の

完成であり、第二は、それによって、その人々の形成する国家、社会を平和的な理想社会（国家）にすることである」と分析している。すなわち教育基本法に示されているわが国の教育の目的とモンテッソーリの教育の目的は、両者とも人格の完成と、それによる平和な国家、社会の形成であると解釈することができ、一致しているといえよう。

続いて、学校教育法に示されている幼稚園教育の目的についても確認しておこう。第22条において、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健全やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」としている。

モンテッソーリは、教育の原理について、「教育とは生命に対する援助です。それは生命を擁護するものです。つまり、教育とは発達のそれ自身の法則にしたがって、生命を助成することです。」¹³⁾と述べている。また、前章で触れたように、オスワルトは、モンテッソーリの教育理論の二大原理は「自己発達の助成」と「環境構成」であると分析している。すなわち両者とも適当な環境によって子どもの発達を援助することを教育の目的、原理としており、ここでも一致している。

以上により、関係法令によって示されている教育の目的と、モンテッソーリ教育の目的、原理は一致している点が多いことが確認できた。では、両者の教育観についてもう少し踏み込んで見てみよう。

解説書では、「教育は、子どもの望ましい発達を期待し、子どもの持つ潜在的な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みである。特に、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている。」との教育観が示されている。¹⁴⁾では、その「子どもの望ましい発達」についてはどのように捉えるべきであろうか。さらに解説書を読み進めると「幼児が望ましい方向に向かって発達していくということは、幼稚園教育のねらいに示された方向に向かって発達

していくことである。・・・一人一人の幼児に幼稚園教育のねらいが着実に実現されていくためには・・・」¹⁵⁾ という解説にあたる。これは、相良¹⁶⁾ が平成元年改訂の際にも、その曖昧さの中に潜む危険性について指摘しているが、「子ども本来の姿」よりも、文部科学省による「幼稚園教育のねらい」に示されている子どもの姿が望ましいとしているに等しい。つまりは、「幼児一人一人の特性に応じ」としながらも、文部科学省が示す望ましい姿に向かうように子どもに働き掛け、その人格の形成を図ることが教育であるとも解釈することができる。

オスワルト¹⁷⁾ は「子供は誕生以来、一つの活動的な精神的生命を持ち、そうしてその未来のパーソナリティーの構成設計を、自らのうちに担っているのであるから、まず第一に教育者のなし得ることで、子供の自己形成を助成する立場を果たすことほど重要で、しかも実証的なものはないのである。この教育観は、モンテッソーリの全生涯とその著作に主張されているものである。」と述べている。つまり、望ましい姿ありきではなく、一人一人の子どもの内側に備わっている成長へ向けての積極的な力を信頼し、それによって子どもが「自分で自分をつくり上げていく」自己発展の力を十分に機能させることができるように助成するのが大人の役割であり、その有効性がモンテッソーリ教育によって実証されているということである。そこには、子ども一人一人の中に準備されたパーソナリティーへの絶対的な信頼がある。モンテッソーリは、その著書の各所において、子どもを正しく理解していない多くの大人による子どもへの態度(大人の価値観による干渉や強制、大人の権利や知識に基づく指導、等々)が、いかに子どもの発達のを奪っているかについて、モンテッソーリが実際に観察した具体的な場面なども挙げて示している。更に、たとえそれが愛情から発したものであったとしても、実際には子どもの人格を抹殺していると厳しく批判し、大人が変わらなければならないと戒めている。

幸い、幼稚園教育要領には「幼児一人一人の特性に応じた指導」が謳われており、解説書¹⁸⁾ においても、一人一人の幼児らしさを損なわない指導をすることの大切が示されている。大人の価値観による望ましい育ちを子どもに押し付けるのではなく、子ども本来の望ましい育ち、そして自己形成の過程を助成する大人の役割を正しく理解し、幼稚園教育の目的が達せられるよう、モンテッソーリ教育学による示唆から学ぶべきことは大きいと言えそうである。

2. 環境による教育

本節では、「環境による教育」において、子どもにとっての環境をどのように捉え、具体的にはどのような環境が適切と言えるのか、その根拠となる子ども観を含めて考察してみたい。

1) 環境観

子どもと環境との関係について、解説書では、「幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。」¹⁹⁾ また、モンテッソーリも、「子供は発達過程で人間の能力、力、知性、言語、を獲得するばかりか、同時に環境の状況に応じて自分の存在を築き上げます。・・・」²⁰⁾ とし、両者とも環境が子どもに与える教育的な重要性を指摘している。また、環境構成に対する視点についても、子どもの姿から、発達の実情に沿った適切な環境を構成することにより、子どもの成長発達を援助することが大切であるという点において、両者は共通している。

ただ解説書²¹⁾ では、幼児の興味や関心は次々と変化し、深まり発展するという前提に立ち、それに合わせて環境条件も変わらざるを得ないとし、したがって、構成された環境は暫定的なもので、常に再構成の必要性があるとしている。その上で、幼児の活動に沿った環境の構成への考え方として示されているのは、子どもが段ボールで作ってあれば、その活動に必要なになりそうな素材や用具の準備をする、といった程度の例にすぎない。環境が子どもの必要性から逸れたものにな

らないよう常に子どもたちの実情を理解していくことは大切であるが、環境の再構成が中心的な視点となってしまえば、見通しの浅い後追いの環境構成、また、結局は教師主導の誘導的な保育に陥る可能性が否定できない。環境構成への視点には、子どもが「なぜそれをしたのか」「なぜ、今、しなければならないのか」といった子どもの活動欲求に対する根拠、また、興味や関心が次々と変化するのであれば、「それはなぜか」、「このことに興味を持った子どもが次に興味を示すのは何か」といった、子どもの発達の順序性に対する根拠が必要であり、それを援助するための計画性が重要である。

モンテッソーリ教育では、次項で触れる「敏感期」等の科学的根拠により、子どもの発達の順序性に沿った環境構成の具体的方法が体系的に構築されている。

2) モンテッソーリ教育における環境構成の根拠となる子ども観

ここでは、具体的な環境について考察する前に、モンテッソーリ教育において、環境構成の根拠となっている子ども観について見ていく。

モンテッソーリの最も重要な発見の一つは、子どもの発達段階に見られる「敏感期」の存在である。「敏感期」とは、生物学において、「ある生物の発達段階に見られる特殊な感受性」のことであり、モンテッソーリは、似たような現象が子どもの発達段階にも見られることを確認し、それを教育に利用した。²²⁾そして、敏感期のエネルギーによって子ども自身が自由に活動を選択し、その作業に集中すること、そして満足して活動を終わることによって、子どもの肉体的エネルギーと精神的エネルギーが統合され、子どもが正常化されるという「活動のサイクル」を発見した。²³⁾更には、その集中を起こさせる外的条件を研究し、「整備された環境」と「自由の保障」によって、意図的に「活動のサイクル」を起こすことができることを発見し、この原理によって「モンテッソーリ教育法」を構築していった。解説書では、幼稚

園生活において、幼児が主体的に環境とかかわり、十分に活動し、充実感や満足感を味わうことが大切であるということが各所で述べられているが、その根拠をこの「活動のサイクル」に求めても良いのではないだろうか。

解説書にも、「発達の過程は、ある時期には身に付けやすいが、その時期を逃すと、身に付けにくくなることもある。」²⁴⁾と、モンテッソーリが言う「敏感期」と同様、幼児の望ましい発達において適時性を考えることの重要性には触れているが、長期的な見通しに立った緩やかなものとして捉えられている。対して、モンテッソーリは敏感期を逃すことの重大さについて、「編み落し目の目」や「最終バスへの乗り遅れ」に例えて、「さらに高い次の段階に移ってしまえば、前の段階で得られたものにも手が出せなくなっています」と、それが永久的な結果として固定される可能性を指摘している。²⁵⁾

前節において、モンテッソーリの教育理論の二大原理は「自己発展の助成」と「環境構成」であることに触れたが、すなわち、子どもの「敏感期」に沿った環境を構成し、「活動のサイクルによって子どもが自分で自分をつくり上げていく」過程を援助することが、モンテッソーリ教育の鍵であると言えるのである。

3) 具体的環境

では、その「敏感期」のエネルギーによって自分自身をつくり上げていく子どもを、より良く援助する環境とはどのようなものであろうか。

モンテッソーリは、具体的な環境として「整えられた環境（秩序のある環境）」の重要性を指摘している。²⁶⁾整えられた環境の目的について、「成長の途上にあるこどもを、できうる限りおとなから独立させることです。すなわち、その場所では、おとなの直接的な手助けなしに、こどもが自分のためにいろいろなことをする自分の生活ができるのです。・・・ここは、こどもが自分の生活をどんどん指揮し、自分を教えることによって、自分の力を意識するようになる場所です。」とし、特

に3歳頃に顕著になる「秩序の敏感期」²⁷⁾にいる子どもたちにとっては、環境内の物がいつも見慣れた場所にきちんと置かれているか、一日の流れがいつもの通りの順序で進んでいくかなどが大問題であり、子どもたちと秩序ある環境との間にできる相互扶助的な関係、すなわち子どもと環境との信頼関係が、子どもの主体的な活動を可能にするとしている。

これに加え、モンテッソーリは環境についての具体的な条件として、子どものサイズである（大きさや重さ、心理的能力）、美しく魅力的である、誤りに自分自身で気づき自分でその訂正をすることができる、子どもの活動に適切である、量的に制限されていること（子どもの精神的な秩序のため）、等々を挙げている。^{28) 29)}

モンテッソーリ教育は、具体的な教育方法として、これらの条件を満たす体系的な教具と、その使い方を示すための提示法を持つが、それらの教育内容ほぼ全てが幼稚園教育要領が示す教育内容に対応している。紙幅の都合上、その対応について網羅することはできないが、一例を挙げてみたい。

「健康」の領域の「内容(7)身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。」に対応する教育内容としては、「日常生活の練習」における「自分の世話」「環境の世話」が該当する。具体的活動としては、手を洗う、上着をハンガーに掛ける、衣服をたたむ、着衣枠によるボタンやスナップ・チョウ結び等の練習、食卓の用意、机を拭く、床を掃く、アイロンをかける等々、多くの活動がある。これらに必要な道具が、子どもの必要性に応じていつでも使えるように常に環境として整えられ、具体的なやり方を示す「提示」によって子どもたちに伝えられる。

この「日常生活の練習」の他に、幼児期の敏感期を援助するための「感覚教具」「数教具」「言語教具」「文化に関する教具」などが、子どもたちがいつでも使えるように「整えられた環境」の中

に秩序を持って準備されているのが、モンテッソーリ教育法を実践する幼稚園の典型的な環境である。そしてその環境の中で、子どもは「活動を選択し」、「繰り返し」、「集中して」、「正常化する」という「活動のサイクル」を辿りながら自分自身をつくり上げていく。その活動を保障するためには、子ども自身が主人公となって自己形成の仕事を果たしていくことができるように、大人の都合ではなく子どものテンポを大切にすることが重要な要素の一つとなる。

4) 教師について

最後に、環境の重要な要素である教師について見ていきたい。

「環境による教育」における教師の役割は、子どもにとっての適切な環境を構成することと、その環境と子どもをつなぎ、その子どもの成長発達を援助することである。教師は人的環境として、環境の中の重要な要素に位置付けられるが、特にモンテッソーリ教育においては、「訓練された教師の存在なしには、整えられた環境は役に立たず、もっと悪い結果が生まれる」³⁰⁾と、教師の重要性が強調されている。

スタンディング³¹⁾は、「整えられた環境とつながりを持つ先生のための実際的なルール」として、14の具体的なルールを示しているので、その一部を抜粋する。

- ・環境への細心の配慮—清潔、整頓、そしてこざっぱりとさせておく。
- ・道具の使い方を教える—日常生活活動の方法を示す（こども達みなが見習えるように、動作は穏やかでていねいに、そして正確に）。
- ・こどもを環境に親しませ（積極的にはたらきかけ）、交流が成立したら自分は控え目になる。
- ・こどもが助けを必要としているところを見落とすことのないよう、つねに観察を続ける。
- ・こどもの訴えに耳を貸し、それに応ずる。
- ・仕事をしているこどもを尊重し、さげすまない。

・間違えているこどもを尊重し、間違いをたださない（「教えながら教え、訂正しながら教えない」）。

・教師の存在を求めているこどもには、その場にいることを感じさせ、すでにその存在を見出したと感じているこどもからは、姿を隠す。

これらから、徹底した「援助者」としての教師の姿を窺うことができ、またそれは、「環境による教育」を実践する者に共通に求められるものであると考えることができる。成長発達の各段階、すなわち敏感期における自己形成のための仕事は、子どもが自身でやり遂げていかななくてはならないことであり、誰にも直接の手助けはできない。大人ができることは、子どもの成長発達を援助するための環境を整え、その仕事に全精神をかけて取り組む子どもを尊重することである。

VI. まとめ

本稿では、幼稚園教育要領及びその関係法令によって示されたわが国の幼稚園教育の方向性と、モンテッソーリ教育学の原理や教育法の接近を試み、考察を行ってきた。その結果、両者の一致点が多くあることが改めて確認され、また、幼稚園教育要領及び解説書が示す弾力的、抽象的な方向性や、両者の相違点と思われる部分についても、モンテッソーリ教育学の科学的根拠や具体的方法によって有効な示唆を得ることができた。

モンテッソーリ教育は、いわゆる「モンテッソーリ・メソッド」といわれる体系化された教育方法を持つ。モンテッソーリ・メソッドを採用している園において、まず視界に入ってくるのは見慣れない数々の教具であるだろうし、また、子どもとその環境を繋ぐためには、教師もトレーニングが必要である。このような点などから、モンテッソーリ教育は特殊性や閉鎖性を含んだ教育法だとの印象を受けてしまう可能性は否定できない。しかし、モンテッソーリ教育には重要な側面がある。それは、誰にでもすぐに取り入れることができる「子どもの見方とそれに対する大人の役割」を示して

いるということである。すなわち、理念を押さえてさえいれば、教師に限らず子どもと関わっている人なら誰にでもすぐ実現できる要素があるということである。

子どもの特質について正しく理解しその自己発展のための適切な援助を行うために、そして幼稚園教育要領に示される「環境による教育」の本質を正しく理解してより効果的な教育を行うために、モンテッソーリ教育学に示唆を求めることは大きな意義を持っていると言えよう。

文 献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領解説。東京，フレーベル館，2008.
- 2) 早田由美子：改革者としてのモンテッソーリと近年における世界のモンテッソーリ教育。現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践，KTC中央出版：21-22，2016.
- 3) 早田由美子他：現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践，KTC中央出版：274-308，2016.
- 4) 市丸成人：改訂モンテッソーリ教育学入門。28-34，東京，学習研究社，1976.
- 5) M・Montessori:What you should know about your child.1948. 林信二郎，石井仁訳：子どもの何を知るべきか モンテッソーリの教育 子どもの発達と可能性。181，あすなろ書房，1980.
- 6) M・Montessori:Education for a new world.1946. 吉本二郎，林信二郎訳：モンテッソーリの教育・0歳～6歳まで。16，あすなろ書房，1993.
- 7) E・M・Standing: Maria Montessori her life and work.1957. クラウス・ルーメル監修，佐藤幸江訳：モンテッソーリの発見。23-51，エンデルレ書店，1975.
- 8) P・Oswald:Das Kind im Werke Maria Montessoris.1958. 保田史郎訳：モンテッソーリ教育における児童観。86-99，理想社，

1971.

- 9) 相良敦子：モンテッソーリ教育リバイバルから半世紀を経て見えてきたこと—脳科学の時代に至って—。現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践, KTC中央出版：249-252, 2016.
- 10) 前掲書3), 310-324.
- 11) 前掲書9), 236.
- 12) 前掲書4), 97-98.
- 13) 前掲書5), 16.
- 14) 前掲書1), 24.
- 15) 前掲書1), 39.
- 16) 相良敦子：幼稚園教育要領の改訂とモンテッソーリ教育。モンテッソーリ教育, 32：51-52, 1999.
- 17) 前掲書8), 86.
- 18) 前掲書1), 34-38.
- 19) 前掲書1), 24.
- 20) M・Montessori:The absorbent mind.1948. 菊野正隆監修, 武田正實訳：創造する子供。62, エンデルレ書店, 1973.
- 21) 前掲書1), 175-189.
- 22) 前掲書7), 157-192.
- 23) 前掲書7), 235-258.
- 24) 前掲書1), 11-12.
- 25) 前掲書7), 183-185.
- 26) 前掲書7), 380-405.
- 27) 前掲書7), 164-174.
- 28) 前掲書4), 70-76.
- 29) M・Montessori:The discovery of the child.1948. 鼓常良訳：こどもの発見。119-127, 国土社, 1971.
- 30) 前掲書7), 399.
- 31) 前掲書7), 404-405.

Essence of Montessori Education in Japan's Kindergarten Education Guidelines:

Implementing Education Through the Environment

KANEMARU Masako and ODA Shinichi

Abstract: According to the School Education Act, the purpose of kindergarten education in Japan is to “provide an appropriate environment for the healthy growth of young children and aid the development of young minds and bodies.” Furthermore, the Kindergarten Education Guidelines provide standards for kindergarten education so that the above purpose would be achieved. However, since the expressions used in the Kindergarten Education Guidelines leave ample room for interpretation, the Guidelines lack concreteness and do not provide clear indications about what education methods are to be used. Accordingly, kindergartens throughout Japan have explored various educational methods, and the educational methods adopted do not always correspond to the Guidelines. This study considered the effectiveness of understanding and implementing the Kindergarten Education Guidelines, which center on learning through the environment and through the principles of Montessori education (scientific views of children and education and the specific methodologies derived from these), which also focuses on interaction with the environment. The results indicated that the scientific basis and specific methodologies of Montessori education lend concreteness to the Kindergarten Education Guidelines, thereby reinforcing their educational significance.

Keywords: Montessori education, Kindergarten Education Guidelines, education through the environment